

メディアによるハンドボールの普及
—早稲田大学ハンドボール部員に注目して—

The spread of handball by the mass media
~Focusing on the players of the Waseda University~

1K08A116-7 島田 亜紀恵

指導教員 主査 トンプソン・リー・A 先生 副査 石井昌幸先生

I はじめに一動機と目的 本研究は、筆者がハンドボール部で学生トレーナーとして活動する中で、マイナースポーツのメディアによる競技普及について興味を持ったことから始まった。協会登録数の調査や、新聞記事を対象にした調査、また現役の大学生競技者に対するアンケート調査を行うなどして、競技の本質的な普及の一助となるよう、考察を行ったものである。アンケート調査は早稲田大学ハンドボール部に限ったものではあるが、全国各地から部員が集まっていることや、このような研究が20年近く行われていなかったことなどから、この研究の意義を見出す。

II 先行研究 本研究にあたり、1993年、1994年に、永吉が行った、「非メディア型スポーツ観戦者の観戦態度に対する研究 - ハンドボールゲーム観戦者を事例として - 」及び、「メディア型スポーツ観戦者の観戦態度に対する研究 - アメリカンフットボール観戦者を事例として - 」を先行研究として読んだ。その背景と結果、考察を述べる。

III ハンドボールについて ハンドボールの歴史、日本における競技の成り立ちや、協会について、また競技の概要について述べる。競技の歴史や特性、組織について知ること、競技普及の様子や問題点を伺うことができる。例えば、競技普及に関する問題は多様だが、競技レベルが上がってもアジア圏で韓国に勝つことができないことが問題点の一つであり、そこから、2000年以降、若年層からの一貫教育システムに力を入れていることなどが浮かび上がる。また、ここでは、北京オリンピック予選で注目を集めた「中東の笛」問題にも触れる。

IV 仮説 本研究では、先行研究の調査などから、3つの仮説を立てた。そのうち、仮説aは、「現在の大学生のハンドボール競技者は、メディアの影響を受けることなく競技を始めた。」である。

V 調査と方法 本研究における調査は、「財団法人日本

ハンドボール協会登録数」、「新聞各紙の記事数」、「早稲田大学ハンドボール部男女に対するアンケート調査」の3種類を行った。日本協会ホームページでの調査、朝日新聞・読売新聞・毎日新聞の記事検索サイトによる調査と、早稲田大学体育会ハンドボール部男子・女子部員に対するアンケート調査である。

VI 調査結果 Vで述べた3種類の調査の結果をグラフにまとめた。また、アンケート調査の結果は、各項目を男女別に円グラフに示し、加えて回答の詳細をまとめた。例えば、「早稲田大学ハンドボール部男女に対するアンケート調査」の中で、「ハンドボールを知ったきっかけは何か」の問いに、何らかのメディアを挙げた人は、男子で10%、女子では0%であった。

VII 考察 IVで述べた3つの仮説について、VIで示した調査結果を受け、考察する。そのうち、仮説aは正しいと考えられた。また、メディアによる影響よりも、身近な人の影響が大きいと推測された。地域による差もあり、ハンドボールが根付いている地域や、競技環境が整っている地域では、メディアを通さず競技に触れていた影響が大きい。これらに加えて、男女の相違点についても考察した。男子の競技の方が、女子と比べて、メディア露出が多かったことが考えられた。さらに、男女の性格の違いも関わってくるのではないかと推測された。

VIII まとめ—ハンドボール普及のために— これからのハンドボール普及のためには、選手だけではなく、競技そのものが、メディア、特にテレビで扱われる必要がある。そのためは、協会や選手が働きかけることが重要である。また、協会や都道府県協会の構造改革や、アジア圏や世界での協会同士の連携が求められる。このようにして競技の認知度が広まることで、競技レベルが上がり、練習環境の改善や、人々が競技に触れる機会の増加が図られ、競技人口の増加、競技レベルの上昇、という循環が生まれる。最後に、このような、今後の競技普及のための一方法をまとめる。

